

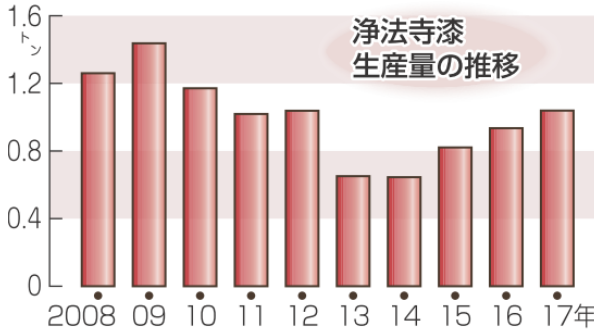
県産漆量産へ始動

林業者や企業経営者ら有志

苗木の栽培から一貫

20年後に100万本確保へ

県内外の林業者や企業経営者の有志は今月、県産漆を量産するウルシ・ネクストプロジェクトに乗り出した。苗木から漆液生産まで一貫して手掛け、当面は盛岡市内の山林7、8杉を軸に県内へ拡大を図る。国産漆は高まる需要に供給が追いついておらず、20年後をめぐりに自給率100%を実現する生産態勢を目指す。



同市上米内の林業細越確太さん(54)、秋田市の経営コンサルタント会社きらいの柴田幸治社長(55)、盛岡市の漆精製・販売浄法寺漆産業の松沢卓生社長(46)の3人が企画し、苗木栽培から植樹までを担う一般社団法人次世代漆協会を今月設立。来年4月ごろNPO法人ウルシ・ネクストを立ち上げ、植樹の参加者を募る。

計画では、同市上米内の山林7、8杉に1杉当たり

2千〜5千本を植樹。5年程度で漆液生産を見込む。採取は木の表面や枝などを衝撃波処理装置で破碎し、遠心分離機にかけて抽出する手法を主に用いる。漆掻き職人が伝統技法を用いる場合は木を十分成長させた上で採取する必要があり、1杉当たり約千本を10年以上かけて育てるが、同プロジェクトは機械の活用で樹齢が若くても採取可能。伝統技法で採る二戸市の浄法寺漆に比べ、品質は多少劣るが量産できる。

植樹には大きな労力が必要のため、幅広い世代が参加する植樹祭を開催。漆への市民の関心を高めるため、勉強会開催や漆林オーナー

制度の導入も検討する。

県産漆を代表する浄法寺漆は年産約1トで国内生産量の約70%に上るが、国産漆の需要は国宝や重要文化財修復だけで年2・2ト程度見込まれ、増産が課題だ。プロジェクトの目標は20年後をめぐりに100万本の生産態勢を確保し、国産自給率を現状の2%から100%に引き上げる。同協会の代表理事を務める細越さんは「漆関係者以外にも賛同を呼び掛け、県産漆を安定的に国内市場に出せる態勢を本県で築きたい」と意気込む。